

# 畠ヶ田南遺跡 I

市営若松第1住宅建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告



2004・3

富田林市遺跡調査会

表紙写真  
調査区西側から  
(阿南氏撮影)

## はじめに

本市のほぼ中心を流れる石川の周辺には、数多くの遺跡があります。中でも、史跡である新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お龜石古墳は、当時の文化や技術を知る上で大変貴重な歴史的資料であります。また、こうした保存され、活用される遺跡の他に土地開発によって失われていく遺跡が多いことも事実です。

本書で報告します畠ヶ田南遺跡は、石川の西岸に営まれた古代の遺跡であり、先に述べた新堂廃寺跡などの史跡と近い場所に位置しております。

この度の調査では、大型の掘立柱建物跡や現在の東高野街道に隣接する場所で道路遺構が発見されました。道路遺構は、石敷きの道路で、本市だけではなく大阪府下においても非常に珍しい発見となりました。また、大型の掘立柱建物は1棟だけではなく複数並んでいた可能性が高く、倉庫群のような景観を示していたと思われます。

本書によって、残される遺跡の他にも失われていく遺跡の存在を知っていただき、今後の埋蔵文化財へのご理解を深め、広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際しまして地元住民の方々には多大なご厚意を承りました。また、今回の発掘調査に対し、ご理解、ご指導を頂いた関係者各位、並びに職場体験で参加して頂いた藤陽中学の学生諸君にも合わせて厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

理事長 堂山博也

## 例　　言

1. 本書は、市営若松第1住宅建替に伴い富田林市遺跡調査会が平成15年度に行った畑ヶ田南遺跡発掘調査の調査概要である。
2. 調査は藤田徹也が担当し、現地調査は平成15年8月27日に着手し、同10月31日に終了した。
3. 現地調査にあたっては、尾張友子、金行美智子、田嶋麻美、西脇由華、村田智美の協力を得た。また、職場体験の一環として、市立藤陽中学二年神崎文哉さんと高橋沙哉さんに参加していただきました。内業整理にあたっては、栗田薫、尾張友子、金行美智子、田嶋麻美の協力を得た。
4. 本書の執筆と編集は、藤田徹也が行った。第Ⅲ章「⑤道路状遺構の石について」は、大谷女子大学学生　田嶋麻美が執筆した。現地写真撮影は藤田が行ったが現地写真撮影の一部については、(有)阿南写真工房に委託した。本書の製図は尾張友子、田嶋麻美、藤田徹也が行った。
5. 本書で使用した方位は磁北（M.N）を示し、標高は東京湾標準海面値（T.P）で表示した。また、土色、遺物の色調については小山、竹原編『新版標準土色帳』を使用した
6. 調査の実施および本書の作成にあたっては下記の方々にご指導、ご協力を得た。  
記して感謝の意を表します。（五十音順　敬称略）  
北野耕平、佐々木理、中村浩、藤井幸司、正岡大次、山中一郎、横山成己

## 目 次

第Ⅰ章	調査に至る経過	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	1
	地理的環境	1
	歴史的環境	2
第Ⅲ章	調査の成果	5
1	調査の方法	5
2	基本層序	5
3	第1調査区の成果	6
4	第2調査区上層遺構面	7
5	第2調査区下層遺構面	9
	①A区	10
	②B区	14
	③C区	16
	④道路状遺構	17
	⑤道路状遺構の石について	19
	⑥出土遺物	20
第Ⅳ章	まとめ	21

### 挿図目次

第1図	畠ヶ田南遺跡周辺の遺跡分布図	4
第2図	調査区配置図	5
第3図	調査区断面模式図	5
第4図	第1調査区遺構面平面図	6
第5図	建物1平面・断面図	7
第6図	第2調査区上層遺構面平面図	8
第7図	第2調査区下層遺構面平面図	9
第8図	溝2断面図	10
第9図	溝3断面図	10
第10図	溝4断面図	10
第11図	A区遺構平面図	10
第12図	溝5断面図	11
第13図	P3断面図	11
第14図	建物2平面・断面図	12
第15図	柱列	13
第16図	土壤1断面図	14
第17図	P12・土壤2断面図	14
第18図	B区平面図	14
第19図	建物3平面・断面図	15
第20図	P15・溝6断面図	16
第21図	溝7断面図	16
第22図	焼土土壤1断面図	16
第23図	焼上土壤2断面図	16
第24図	C区遺構平面図	16
第25図	道路状遺構	18
第26図	石の法量グラフ	19
第27図	出土遺物	20

### 写真目次

写真1	掘削前の調査地	1
写真2	市内南側から調査地を望む	1
写真3	市内北東から調査地を望む	1
写真4	調査区東側から遠景 (手前を流れるのが石川)	3
写真5	職場体験の中学生(遺構面精査)	6
写真6	職場体験の中学生(遺物洗浄)	6
写真7	建物1検出写真	7
写真8	第2調査区上層遺構面	8
写真9	第2調査区下層遺構面	9
写真10	A区平面写真	11
写真11	C区平面写真	16
写真12	調査区東側から (手前が道路状遺構)	17
写真13	道路状遺構(北側から)	17
写真14	調査区北東方向から	21

## 第Ⅰ章 調査に至る経過



写真1 挖削前の調査地

富田林市建築課が、若松町にある市営若松第1住宅の建替を計画したところ、当地は周知の畠ヶ田南遺跡であった。そこで、発掘調査の委託を受けた富田林市遺跡調査会は、平成15年2月に事前調査を実施した。その結果、遺構や遺物を認め、当工事に先立って発掘調査が必要であると判断した。調査は、現地での発掘調査を平成15年8月27日から開始し、10月31日に終了した。整理は、一部発掘調査と並行して行い、平成16年3月に本書の刊行をもって調査を終了した。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境



写真2 市内南側から調査地を望む



写真3 市内北東から調査地を望む

畠ヶ田南遺跡の所在する富田林市は、大阪府南東部にあり東西約6.5km南北約10kmである。西には、羽曳野丘陵を望み、南は和泉山脈から派生する金胎寺山、嶽山が連なる。この丘陵の北側で、金剛山地を源とする佐備川や千早川が和泉山脈を源とする石川と合流し北流し、藤井寺市で西流する大和川と合流する。市域を地形的にみると、西側に広がる羽曳野丘陵と石川右岸に位置する金胎寺山・嶽山などの和泉山脈へと続く山々、そして両者に挟まれた石川沿いの平野部の3つに分けられる。

遺跡は、石川左岸の中位段丘縁部にあたり、近鉄南大阪線富田林駅の東方約500mに位置する。現在確認されている遺跡の範囲は東西、南北ともに約50m、行政区区分上は、大阪府富田林市若松町に

あたる。

石川左岸の中位段丘は、市の南東に隣接する河内長野市から緩やかに標高を下げながら、市域北側へと続く。中位段丘の東側は、段丘崖が延々と続き、直下の沖積地や低位段丘との隔絶は明瞭である。当該遺跡の約200m南側には中世後期に形成された富田林寺内町があり、今次調査区のすぐ西側には東高野街道が通る。

遺跡の立地する石川左岸中位段丘は、石川を直下に望む起伏の乏しい生活に良好な環境を呈し、市域でも最も多く遺跡が分布する地域でもある。以下、石川左岸に形成された遺跡を中心に概観していく。

## 2 歴史的環境

富田林市域における石川左岸地域で人々の生活の痕跡が認められるのは、後期旧石器時代からである。畠ヶ田南遺跡の約500m北方に所在する中野遺跡からは、国府型ナイフ形石器が出土している。また、約1km南に所在する谷川遺跡から木葉形尖頭器が出土している。これらに後続する時期のものとして、中野遺跡や中野遺跡の北側に位置する喜志遺跡、喜志西遺跡、太郎池遺跡が挙げられ、これらの遺跡からは有舌尖頭器が確認されている。いずれの場合も明確な遺構に伴うものではなく、未だ不明な点が多い。

縄文時代においても、市域内の遺跡の中で明瞭な生活の痕跡を示す遺構の検出などは少ない。前期では、北白川下屏式を主とする土器が錦織遺跡から採集されており、また、錦織遺跡の南西に位置する錦織南遺跡からは、縄文時代の河道跡が検出されている。そこから、滋賀里Ⅱ式とⅢ式の土器が出土している。また晩期では、滋賀里Ⅲ式と大洞C1式がともに出土し、興味深い成果として挙げられる。

弥生時代になると、石川左岸段丘上では多くの遺跡が確認されている。前述した喜志遺跡からは、第I様式の煮が確認されている他、中期には、住居跡、方形周溝墓など集落の状況が明瞭に確認できるようになる。この他、喜志西遺跡、中野遺跡、甲田南遺跡など、中期に盛行する遺跡が確認されている。これらの遺跡の中で、喜志遺跡と中野遺跡からは、後期の土器も出土しているが、その資料は後期後半に該当し中期から後期に継続する集落とは考えにくい。また、それ以外の遺跡についても後期に継続する状況は確認できない。

石川右岸の丘陵上には、彼方遺跡、滝谷遺跡、尾平遺跡など、後期のいわゆる高地性集落が展開している。それに対し、石川左岸地域では、前述した喜志遺跡、中野遺跡以外の後期集落は未確認である。しかし、近年の調査において羽曳野丘陵上から後期に該当する遺物が出土しており、今後の調査によって石川右岸の丘陵上に見られるような後期集落の存在を確認できる可能性がある。

古墳時代になると、羽曳野丘陵の東縁に古墳が築かれるようになる。前期の古墳としては、北から円墳の鍋塚古墳、前方後円墳の真名井古墳、方墳の宮林古墳、前方後円墳の廿山古墳が挙げられる。また、中期には、新家古墳や川西古墳が挙げられる。これらの古墳は、石川左岸の段丘上に集落としての展開をみせる喜志、中野、甲田南遺跡を基盤とした集団の首長墓として捉えられる。

後期になると、石川右岸地域では、巖山古墳群や田中古墳群など横穴石室で構成された群集墳が展開し、中佐備須恵器窯では5世紀末から6世紀前半に該当する須恵器が生産される。羽曳野丘陵上では、平1・2号墳、美具久留御魂神社裏山第2号北方古墳、廿山南古墳などの木棺直葬の古墳

が群集形態をとらない状況で点在し、石川の右岸と左岸では古墳の様相が大きく異なる。

終末期では、新堂廃寺、お龜石古墳、オガソジ池瓦窯が成立し、地理的に隣接する中野遺跡は、これらに連なる集落として考えられる。

この時期以降、集落としての性格が垣間見ることができる遺跡としては、前述した中野遺跡の他に、桜井遺跡、烟ヶ田遺跡、谷川遺跡、富田林寺内町遺跡、錦織遺跡、甲田遺跡などが確認できる。また、中野遺跡では、7世紀以降の幅約1mにもおよぶ柱穴が検出され、いわゆる官衛であった可能性も指摘されている。桜井遺跡は、「桜井屯倉」の可能性も指摘されており、今次調査区の成果を踏まえて考えると興味深い。

#### 参考文献

- 栗田薰「第Ⅰ章 第1節 位置と環境」「新堂廃寺跡・オガソジ池瓦窯跡・お龜石古墳」富田林市教育委員会  
2003
- 岩瀬透『喜志西遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会 1994
- 小浜成『新堂廃寺発掘調査概要Ⅱ』大阪府教育委員会 1999
- 小林義孝『甲田南遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1994
- 玉井功『中野遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会 1983
- 富田林市史編纂委員会(編)『富田林市史』第1巻 1985
- 横山成己「第Ⅰ章 位置と歴史環境」「廿山南古墳」富田林市遺跡調査会 2003
- 中辻亘『中野遺跡発掘調査概要Ⅲ』富田林市教育委員会 1982



写真4 調査区東側から遠景（手前を流れるのが石川）



第1図 畑ヶ田南遺跡周辺の遺跡分布図

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 1 調査の方法



第2図 調査区配置図

### 2 基本層序

盛土	1. 床土 7.5YR 5/6明褐色（シルト～極細粒砂）
1	2. 包含層 10YR 5/3に近い黄褐色（シルト～極細粒砂）が混入
2	3. 壁上面が上層遺構突出面 2.5Y 5/4黄褐色（シルト～極細粒砂）に 10YR 4/6褐色（シルト～極細粒砂）が混入
3	4. 下層遺構面の包含層 10YR 4/2灰黃褐色（シルト～極細粒砂） 他の層より若干粘性強
4	

第3図 調査区断面模式図

床土である。水田の耕土は、壁全面において確認されず、床土のみが確認できた。②は、層厚約10cmの包含層で、この層を除去した後、③で上層遺構面を確認した。③は、層厚約10cmの下層遺構面包含層であり、その下層が地山となる。④層は、調査区の東側壁面で確認されたものの、調査区中央付近では、③層を除去後、地山となる。先に述べた様に、今次調査区は中位段丘の縁部にあたり、西から東側に向かって傾斜する傾向にある。④層の包含層は、やや土地の低い部分にのみ堆積していたものか、あるいは、上層遺構面で生活していた人々の整地とも考えられるが、確認した④層には、ブロックなどの堆積状況はみられなかった。いずれにしても、今次調査区は全体的に搅乱を受けている範囲が多く、今後の調査によって明らかになることであろう。

市営住宅建替に伴い、その基礎となる部分と、防火水槽設置に該当する部分について調査区の設定を行い、防火水槽部分について第1調査区、建物となる範囲を第2調査区と設定した。調査は、第1調査区を先行して調査を行い、第1調査区調査終了後、第2調査区を掘削し、第1調査区地を残土置き場として利用した。

試掘調査において、2層の遺構面を検出した。よって、上層遺構面の包含層上部までを機械掘削、それ以下を人力によって掘削を行った。遺構の断面図は、1/10で実測をおこない、調査区壁面は、1/20で記録した。

第1調査区、第2調査区共に近世から現代における数度の削平、搅乱によって著しい破壊を受けており、調査区壁面において表土から地山面までの堆積状況を確認できた箇所はほんのわずかでしかなかった。ここでは、確認できた小範囲の観察から得られた今次調査区の基本的な層序についてまとめていきたいたい。

調査地全面に、盛土が敷かれていた。①は床土である。壁全面において確認されず、床土のみが確認できた。②は、層厚約10cmの包含層で、この層を除去した後、③で上層遺構面を確認した。③は、層厚約10cmの下層遺構面包含層であり、その下層が地山となる。④層は、調査区の東側壁面で確認されたものの、調査区中央付近では、③層を除去後、地山となる。先に述べた様に、今次調査区は中位段丘の縁部にあたり、西から東側に向かって傾斜する傾向にある。④層の包含層は、やや土地の低い部分にのみ堆積していたものか、あるいは、上層遺構面で生活していた人々の整地とも考えられるが、確認した④層には、ブロックなどの堆積状況はみられなかった。いずれにしても、今次調査区は全体的に搅乱を受けている範囲が多く、今後の調査によって明らかになることであろう。

### 3 第1調査区の成果

調査区の大部分が、後世の破壊によって搅乱を受けており、遺構面を確認できたのは、南東角においてのみであった。調査区壁面の観察では、上層遺構面と考えられる層の確認は出来たものの、平面では現代盛土によって削平されており、地山での検出となつた。後述するように、第2調査区の成果では2面の遺構面を確認しており、当該調査区において確認した遺構面は、第2調査区で説明する下層遺構面に該当する。確認できた遺構はP1のみである。このピットの周辺は、第2調査区も含めて搅乱を受けており、柱穴の可能性が高いものの、その性格は不明である。出土遺物として土師器片が挙げられるが細片のため図示することが出来なかつた。



写真5 職場体験の中学生（遺構面精査）



第4図 第1調査区遺構面平面図



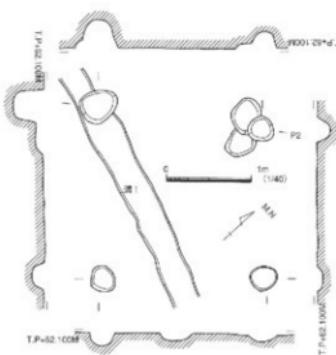
写真6 職場体験の中学生（遺物洗浄）

#### 4 第2調査区上層遺構面

##### 建物1

調査区が北側に向かってL字に屈曲する箇所で掘立柱建物を1棟検出した。北西角にあたる柱穴は、3つが重複している。他の3つの柱穴がほぼ $90^{\circ}$ で構成されているのに対し、北西角にあたるこれらの柱穴は、いずれも他の柱穴と比較しやや軸がずれる。

建物を構成する他の柱穴では、掘り直しなど柱穴の重複はみられない。また、遺構埋土の観察から、P2を含む柱穴はほぼ同様の状況を示している。このことから、建物が長期にわたる存続や、建替えなどではなくP2周辺のみ掘り直しが行われたものと推測できる。



第5図 建物1平面・断面図



写真7 建物1検出写真

##### 溝1

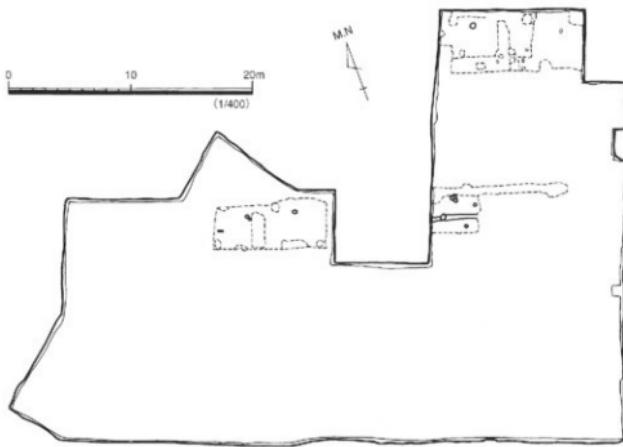
幅約35cm、深さ約5cmの溝である。遺構の埋土は2.5Y6/2灰黄色の比較的均質な粘質シルトである。遺物の出土がなく時期の特定は出来ないが、建物1以降である事が確実であることから中世以降の所産であると考えられる。

第2調査区上層遺構は先述したように、遺構面のほとんどが擾乱を受けていたために、遺構、遺物の出土から遺跡の性格を表すにはほとんど困難な状況に近いと言える。

検出された建物1や他のピットの埋土がほぼ同様の傾向を示していることから、溝以外の遺構は、ほぼ同時期に埋没していると考えられる。

出土した遺物は、いずれも細片で、図示が可能な遺物はなかったが、建物1周辺の精査時、すなわち断面模式図(図3)でいう③層から黒色土器A類碗の高台や、和泉型瓦器碗が出土している。また、細片のため区別はできないものの、黒色土器B類碗もしくは和泉型瓦器碗のI期相当の口縁端部も確認している。

以上のような状況から、当調査地は、概ね平安時代後期に集落が営まれ、中世段階以降に水田化がなされたと推定できる。



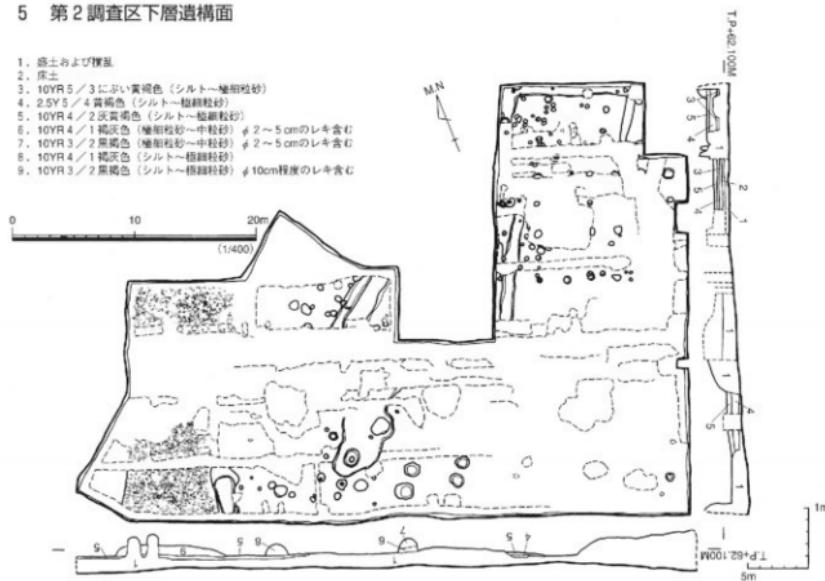
第6図 第2調査区上層遺構面平面図



写真8 第2調査区上層遺構面（1部下層遺構面検出）

## 5 第2調査区下層遺構面

1. 盛土および標記
2. 床土
3. 10YR 5 / 3に近い黄褐色（シルト～細砂粒砂）
4. 2.5Y 5 / 4 黄褐色（シルト～粗砂粒砂）
5. 10YR 4 / 2.5 黄褐色（シルト～粗砂粒砂）
6. 10YR 4 / 2 黄褐色（細砂粒砂～中粒砂） $\phi$  2～5 cmのレキ含む
7. 10YR 3 / 2 黄褐色（細砂粒砂～中粒砂） $\phi$  2～5 cmのレキ含む
8. 10YR 4 / 2 黄褐色（シルト～粗砂粒砂） $\phi$  10cm程度のレキ含む
9. 10YR 3 / 2 黄褐色（シルト～粗砂粒砂） $\phi$  10cm程度のレキ含む



第7図 第2調査区下層遺構面平面図



写真9 第2調査区下層遺構面

下層遺構面は遺構の残存率が高い箇所と全く検出できなかった箇所に分けられる。ここでは、遺構の残りが比較的良好であった3地区について、便宜上A、B、C区に分けて概要を述べていくことにする。

#### ①A区

##### 溝2

調査区北側で検出した。北側が調査区外になるため幅は不明であるが、深さは、最も深い調査区壁側で10cmである。出土遺物が破片のため、時期推定は不可能だが、断面観察から溝3と溝4より先行するものであることが判断できる。溝の軸が先に述べた建物2の軸に近似しており、同一時期の可能性がある。

##### 溝3

調査区北側で検出した。溝は南北にはしり、北側は調査区外に延びる。南側は搅乱され不明であるが、南側には建物2あり、溝がそのまま南に延びていたとすれば建物2と同時期ではないことが理解できる。先述したように、溝1より後出するものである。

##### 溝4

溝3と同様に溝2より後出するものである。溝3とほぼ同様の軸を示しているが、溝の幅や深さは溝3よりやや大きい。後述するC区溝7と同一遺構の可能性がある。



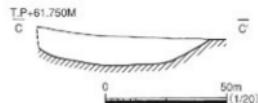
第8図 溝2断面図  
TP=61.750M  
A-B  
0 50cm  
1. 10YR 5/3に近い黄褐色（シルト～粘土質砂）  
φ 2～3cm程度のレキ含む

第8図 溝2断面図



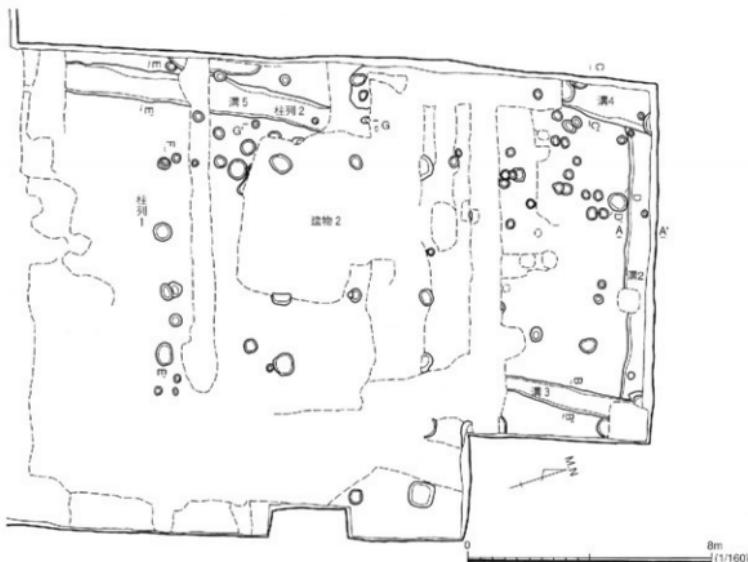
第9図 溝3断面図  
TP=61.750M  
A-A' 50cm  
1. 10YR 4/2灰黄褐色（シルト～粘土質砂）  
地山ブロック・マンガ含む

第9図 溝3断面図



第10図 溝4断面図  
TP=61.750M  
C-C' 50cm  
1. 10YR 5/2灰黄褐色（シルト～粘土質砂）  
L-7.YR 4/6褐色含む

第10図 溝4断面図



第11図 A区遺構平面図

## 溝5

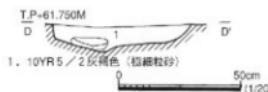
建物2の西側に隣接する。溝の北東側と南西側は、攪乱されて全体の復元は出来ない。調査区北側には、検出されていないことから、途中で方向を変えて屈曲する可能性がある。また、その方向からみて建物2とは、同時期とは考えられない。出土遺物からの時期推定は困難であるが、埋土の観察から建物2よりも後出するものであろう。

## P3

調査区北側の溝2に隣接する。遺構の底部から礎石と思われる石を検出した。周辺に礎石を伴う柱穴は検出されていないが、調査区南西側にも礎石を伴う柱穴が検出されている。建物の復元は困難であるが、瓦葺きの建物の存在が想定される。



第12図 溝5断面図



第13図 P3断面図

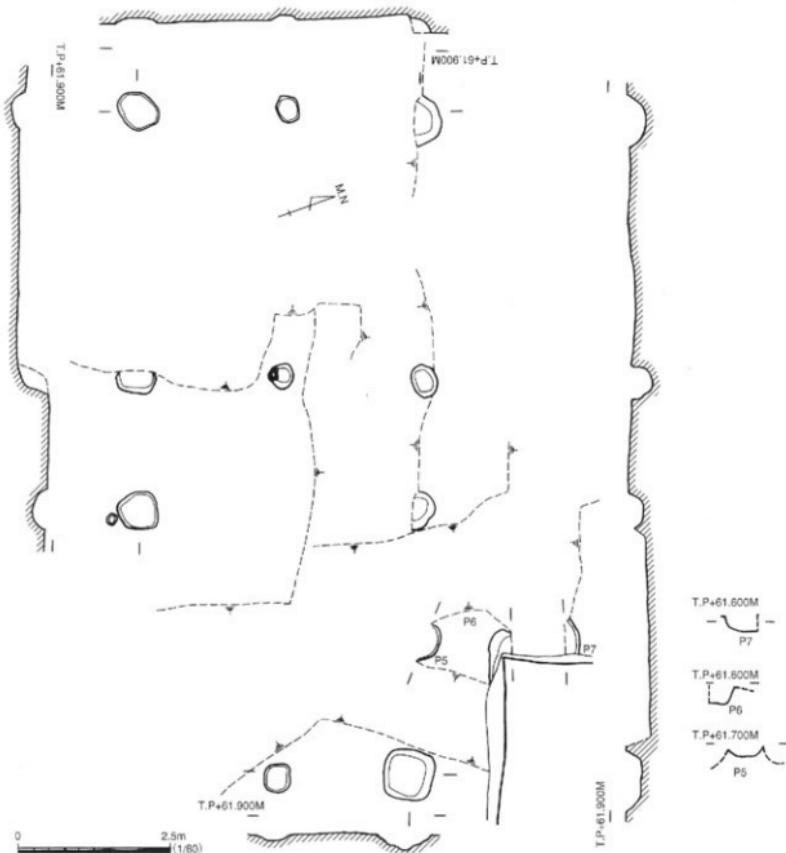


写真10 A区平面写真（阿南氏撮影）

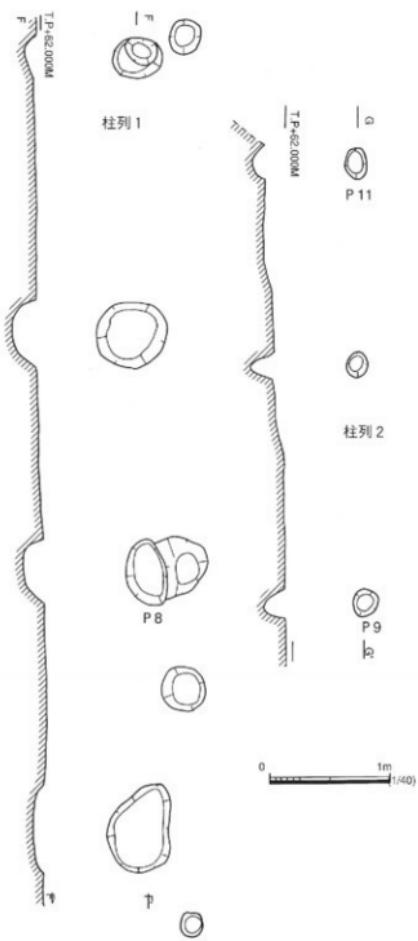
## 建物 2

調査区南東側で検出した。大部分が搅乱で破壊されているが、柱穴の間隔などを踏まえても 2 間 × 5 間以上の建物である。面積は約 50 平方メートルになる。柱間は、東西方向が約 2.1m、南北方向が約 2.5m で南北方向の方がやや長い。西側の列との柱間が若干空いているのは、間に搅乱を挟むからであり、本来はもう 1 列あったものと考えられる。

また、P5 の北側に位置する P7 は、搅乱により破壊を受けており全容は不明であるが、遺構の幅、深度、P3 との位置関係から考えると建物 2 を構成する柱穴と類似しており、検出された掘立柱建物と同規模の建物が並んで建てられていた可能性、もしくは、建物 2 の復元が北側に広がる可能性



第14図 建物 2 平面・断面図



第15図 柱列

がある。P 6 についても同様の事が言える。建物の時期としてP4 からTK209相当の壊身の口縁部が2点出土し、7世紀前半頃と考えられる。

#### 柱列 1

建物 2 の南側に位置し、建物 2 の柱穴とほぼ同間隔で並ぶ。建物 2 の南側列との間隔は、約 4 m 離れており、建物 2 の範囲が柱列 1 にまで及ぶ可能性は考えられない。しかしながら、柱間やピットの位置などを考えると建物 2 と同規模の建物の存在が想定される。列の東側や南側は搅乱で破壊されている面のため遺構の確認はできなかったが、さらに南側に柱列が並び建物があったと考えられる。P 8 から土師器の鉢が出土している。10世紀前半頃の所産と考えられる。

#### 柱列 2

建物 2 の西側に位置し、建物 2 の軸とはほぼ並列する。各ピットの幅は、他のピットと比べ狭くほとんど垂直に掘られている。その幅や掘り方の特徴から杭列であった可能性が高い。建物 2 と主軸が共通することから、建物 2 に対する区画などの意味が考えられるが、詳細は不明である。P10はSD 4 掘削後検出されていることから、SD 4 以前のものであると捉えられる。出土遺物としては、P 9 と P 11から土師器の壊がある。10世紀前半頃の所産と考えられる。

## ②B区

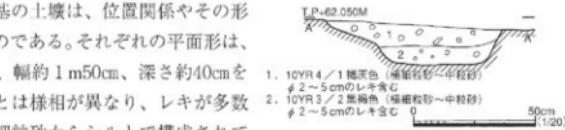
### 土壤1

調査区南側で検出された4基の土壙は、位置関係やその形状からは意味付けが困難なものである。それぞれの平面形は、円形に近い隅丸方形形状を呈し、幅約1m50cm、深さ約40cmを計る。埋土は周辺の遺構埋土とは様相が異なり、レキが多数混入しており、他の遺構が極細粒砂からシルトで構成されているのに対し、比較的粒が大きい細粒砂で構成されている。

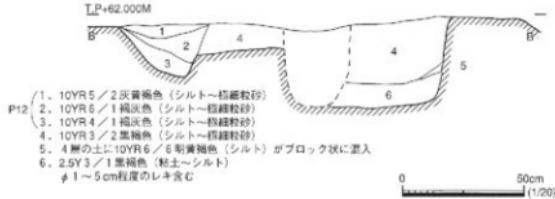
この状況は4基ともに同様の傾向を示す。したがって、これらの埋没過程は、極細粒砂やシルトで構成されている他の遺構とは別の要因を考えるべきであろう。人為的な埋め戻しも想定できるが、出土遺物などはなく帰属時期や遺構の機能などの詳細は不明である。

### 土壤2

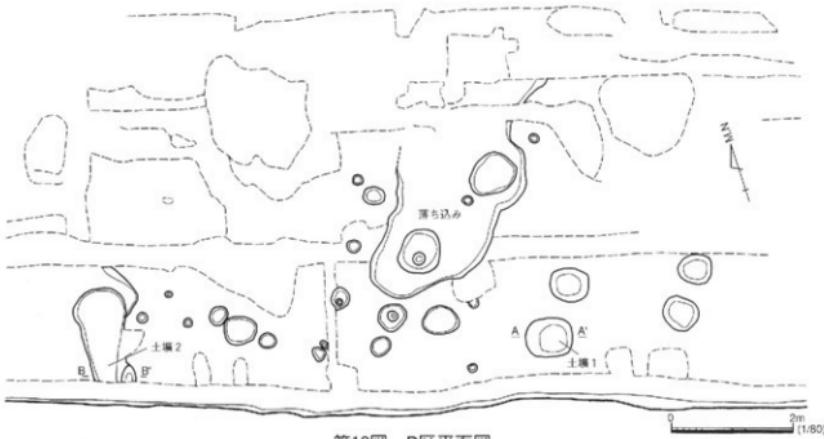
後述する道路状遺構に隣接する。南側は調査区外になり東側はP12により1部残存していない。現状では東西幅約1.4m、南北幅約1.5m、深さ35cmである。出土遺物としては、土師器の甕と須恵器の甕が出土している。



第16図 土壙1断面図



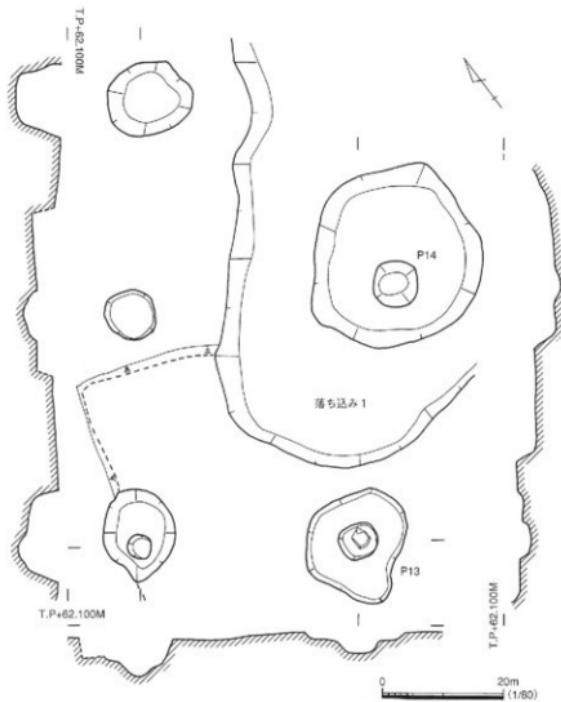
第17図 P12・土壙2断面図



第18図 B区平面図

### 建物 3

調査区の中央付近で検出した。SP13には、礎石が残っていたが、他の柱穴にその痕跡は見られなかった。並びがやや歪んでおり、建物と認識するのにやや躊躇するが、P14の上部が落ち込み1に削られていることなどから、この程度の歪みは獨立柱建物の並びの範疇であると考えた。北東隅にあたるピットは検出できなかった。落ち込み1に削られたものと考えられる。現存で確認できる柱間は約1.8mを計る。いずれのピットも細片の遺物のみの出土であり、帰属時期の推定は困難である。



第19図 建物3平面・断面図

### ③C区

#### 溝6

幅約1m、深さ約20cmを計る。西側はP15に切られており、隣接する溝7やB区の建物3の軸と近似しており、同時期性の可能性が高い。出土遺物は細片のため図示できなかった。

#### 溝7

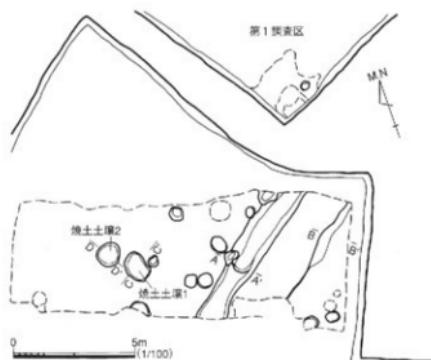
深さ約15cmを計る。東側の掘り方が調査区外になるため幅は不明である。南東方向にいくにつれて深くなる傾向にある。その方向からA区の溝4と同一造構になる可能性が高い。

#### 焼土土壤1

東西約1m、南北約70cmの隅丸方形形状の平面形である。ほぼ中央の約50cm程の範囲において、U字型に熱を帯びて赤く焼けている。焼け土は、厚さ約5cm程度であり、その下は炭化物を多く含む層で構成される。竈である可能性もあるが、焼け土の痕跡や周辺状況からは積極的な評価はできない。

#### 焼土土壤2

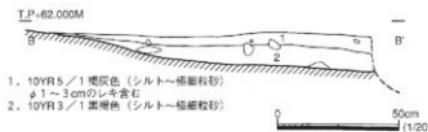
焼土土壤1の西側に隣接する。幅約1mのはば円形状の平面形を呈す。焼土土壤1と同様、焼土ブロックが確認できたが、その造構の機能は不明である。



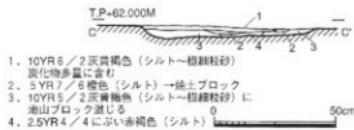
第24図 C区造構平面図



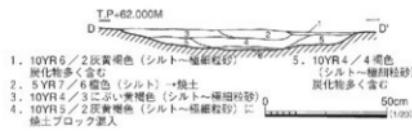
第20図 P15・溝6断面図



第21図 溝7断面図



第22図 焼土土壤1断面図



第23図 焼土土壤2断面図



写真11 C区平面写真 (阿南氏撮影)

#### ④道路状遺構



写真12 調査区東側から（阿南氏撮影）  
(手前が道路状遺構)

調査区の西側で検出した。搅乱に破壊されている箇所もあるが、検出できた範囲では幅約7mを計り、南北方向へと続く溝状の遺構である。南北ともに調査区外へと続き、全体の長さは不明である。検出面直上まで搅乱による破壊を受けているため、さらに上面から掘り込まれていた場合、遺構の幅は更に広がる可能性がある。遺構の深度は約10cmで、検出面から遺構底部までレキが多数敷き詰められている。先述した不明土壌の埋土に混在していたレキの状況とは異なり、埋土に混在というよりはほとんど石のみで構成されているといった状況の方が近い。当該調査区は、全体的に東側の方がやや標高が低い傾向があり、自然の堆積では、この周辺のみ石が流れ込むような状況は考えにくい。また、レキが詰まっている状況は遺構全体に見られることから、このレキ敷きは人工的なものと考えたい。

この溝状遺構の機能としては、遺構の西側約3m先に現在の東高野街道が通っていること、意図的に石が敷き詰められている事などから考えて、道路状遺構であると考えたい。

一般的に道路遺構と呼ばれるものには、両側に側溝が設けられている。今回検出した遺構の両側には側溝に該当する溝の検出が無く課題を残すが、遺構上面が搅乱によって破壊を受けていることから掘り方の浅い側溝が破壊されている可能性は充分に考えられる。

大阪府高槻市鷺上群跡遺跡から検出されている山陽道と考えられる道路遺構には、今回検出した遺構と同様に、多数の拳大のレキが敷き詰められており、類似した遺構として興味深い。

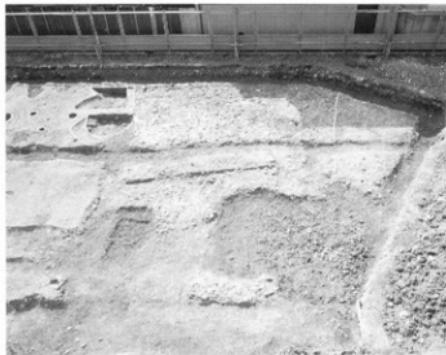
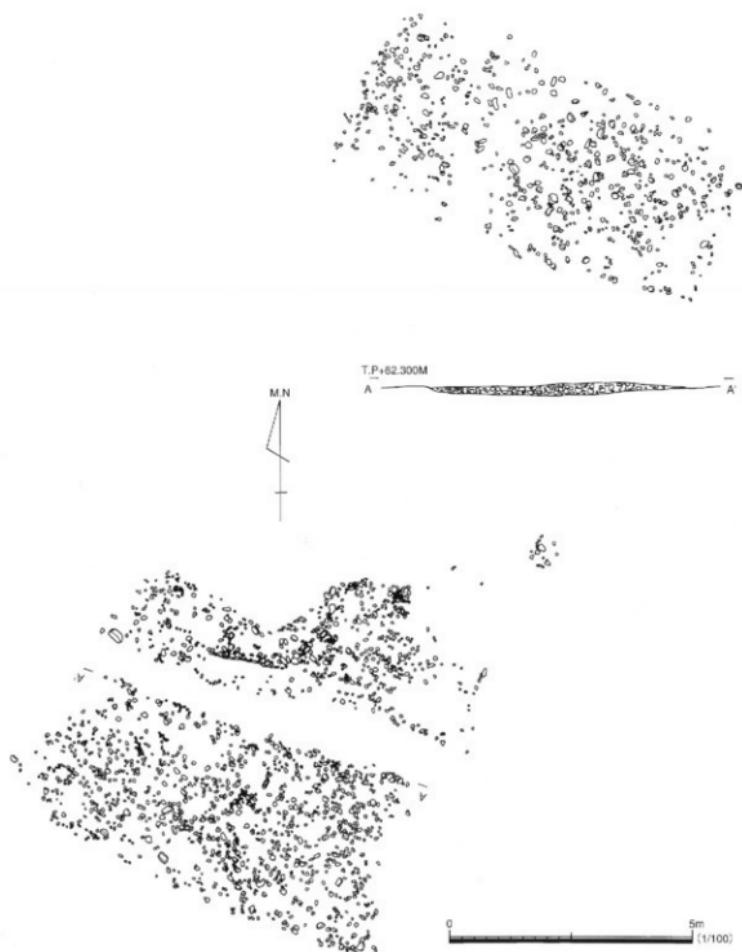


写真13 道路状遺構（北側から）（阿南氏撮影）



第25図 道路状遺構

##### ⑤道路状遺構の石について

今回、検出した道路状遺構に敷き詰められた石の状況を確認するために、最も残りの良かった2m×2mの範囲を任意で設定し、その範囲の石をすべて取り上げた。以下、その総数から考えられた石の傾向について概略を述べる。

遺構から取り上げた石の総数は409点を数える。今回は、これらの石の内破損していないものの287点(70%)の石の測定を行った。

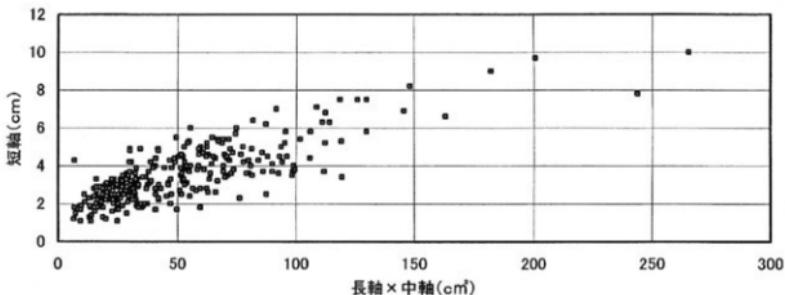
測定方法として、石を立体的に捉るために最も長い線を長軸(最大長)とし、長軸に対してほぼ直角に交わる最も長い線を中軸(最大幅)、長軸・中軸の2方向に対してほぼ直角に交わる最も長い線を短軸(最大厚)として三方向の測定を行った。

その結果、長軸が5cm未満の親指大の石が23点(8%)、5cm以上10cm未満の拳大の石が190点(66%)、10cm以上15cm未満の拳大よりひとまわり大きい石が66点(23%)、15cm以上の人頭大の石が8点(3%)であった。特に拳大の石に関しては、他の石と比較すると扁平な石の割合が多かった。

今回の調査で取り上げた石の範囲は遺構の一部にしか過ぎない。また、遺構上部まで搅乱が及んでいるため、これらの結果が、遺構に敷き詰めた石の全体的な把握に繋がるとは言いがたく、道路遺構を構築した人々が意図的に拳大の石を選択した結果であるかどうかの即断はできない。しかしながら、高槻市の鴎上郡衙遺跡で検出された道路遺構の報告では、取り上げ・測定は行っていないものの、拳大の石が多いという報告がある。比較的容易に運搬・利用のしやすい拳大の石が使用されていると言える。

今回の分析は、限られた範囲の分析であり、石の種類と大きさの関係など残された課題も多い。

しかし、この遺構が道路遺構と考えられる以上、今後の調査によって、周辺の遺跡からも類似する遺構が検出される可能性は十分に考えられる。今回の分析の結果が、今後の類似する遺構の検討に役立てられれば幸いである。



第26図 石の法量グラフ

## ⑥出土遺物

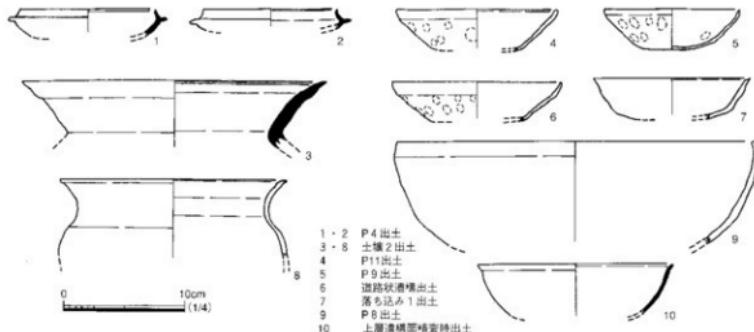
(1・2)は、須恵器の坏身である。ともに推定口径11cmである。口縁部の立ち上がりは低く内傾する。底部は残存しておらず、器高は不明だが、(2)はやや低い。底部は、出土した遺物の細片でも確認できなかった。TK209型式に相当するものと考えられる。

(3)は、須恵器の壺である。口縁部は、外側上方にのびる形をとる。(4～7)は、土師器の坏である。(5)は、高台の付かない坏Aであり、底部の残存していない(4・6・7)は不明である。口縁形態は、2種類見られる。(4・5・6)は、体部から外方に伸びた後、口縁部付近でやや角度を変え直上、もしくはやや内側に傾斜する。(7)は、体部から口縁端部に向かって外反する形態をとる。

(8)は、土師器の壺である。口径は18.4cmを測る。内外面ともに磨耗が著しく、調整は不明である。10世紀前半頃の所産と考えられる。

(9)は、土師器の鉢である。口径は29.4cmを測る。体部から口縁部にかけて丸みを帯びる。内外面の調整は不明である。10世紀前半頃の所産と考えられる。

(10)は、瓦器椀である。口縁部は、外面の強いナデによって外側にのびる形となる。和泉型瓦器椀であると考えられる。口径は16cmを測り、和泉型瓦器椀のI期相当に該当する。内外面のヘラミガキは磨耗のため確認できなかった。



第27図 出土遺物

## 第IV章　まとめ



写真14 調査区北東方向から

今回の調査は、調査区のほぼ全面において搅乱による削平を受けていた。出土遺物についても調査面積と比較して図化可能なものが少量で、各遺構の時期を判断するのには困難な状況である。したがって、畠ヶ田南遺跡の概要を明確に述べるほどの情報量には至っておらず、今後の調査に期待するところが大きい。

今回出土した遺物から、大まかには7世紀前半、10世紀前半、中世に分けられる。7世紀前半の遺構として、建物2が挙げられる。しかし、建物2とはほぼ同間隔で柱穴が並ぶ柱列1の柱穴や、建物2を区画するためのものであると考えられる柱列2からは10世紀前半頃の遺物が出土しており、遺構の評価とそれぞれの帰属時期が異なる。いずれの遺構も搅乱による破壊が著しく、遺構全体の性格を把握するには困難な状況にある。

ただし、10世紀前半頃と考えられる建物3や溝3～5の軸と建物2や柱列の軸とは大きく異なり、同時期であるものとは考えにくい。これは、柱列2の柱穴が溝5に切られていること、建物2と同軸の溝2が溝3・4に切られていることからも明らかであろう。

したがって、ここでは建物2と柱列を10世紀以前、建物3とそれに類似する軸を持つ遺構を10世紀前半として位置づけたい。

上層遺構面の時期については、黒色土器や和泉型瓦器椀I期が出土していることから中世前半期に該当すると考えられる。遺構の残存率が低いため推論の域はでないが、出土遺物の年代幅から長期的に集落が営まれたとは考えにくく、その後は水田として利用され今日まで至ったと考えられる。

道路状遺構については、側溝が未確認であるため、道路幅などについては今後の調査を待たねばならない。現在の東高野街道との距離間については、例えば高槻市嶋上郡衛遺跡などで検出されている山陽道が幾度か改変されていることなどからみれば、当遺跡の道路状遺構についても同様の見解が可能であろう。道路の築造年代や使用時期については、出土遺物から平安時代の使用は認められるものの、それ以外については不明である。

今次調査区は搅乱により大部分が破壊されていたものの、建物2に代表される10世紀以前の大型建物が複数並んでいた可能性を確認できた意義は大きい。また、7世紀前半に始まり、11世紀代に終焉をむかえる当遺跡の消長は、同じ石川左岸の新堂廃寺跡や隣接する各遺跡と同様の傾向を持つ。大型の複数の建物がいわゆる倉庫として考えられるならば、当遺跡は極めて重要な位置を示していると言えるが、詳細は今後の調査に期待したい。

# 報告書抄録

ふりがな	はたけだみなみいせき						
書名	畠ヶ田南遺跡Ⅰ						
副書名	若松第1住宅建替に伴う埋蔵文化財調査						
卷次							
シリーズ名	富田林市遺跡調査報告						
シリーズ番号	24						
編著者名	藤田 徹也 田嶋 麻美						
編集機関	富田林市遺跡調査会						
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎ 0721-25-1000						
発行年月日	西暦2004年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° °'	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
はたけだみなみいせき 畠ヶ田南遺跡	富田林市 若松町1丁目	27214	159	34°30'30"	2003.8.27 ~ 2003.10.31	約1200	若松第1 住宅建替 による
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
畠ヶ田南遺跡	集落	飛鳥時代～ 中世	掘立柱建物3棟 溝 ピット 土壤 道路遺構	土師器 須恵器 黒色土器 瓦器	石敷きの道路状 遺構の検出 複 数の大規模建物の 確認		

